

## YAMATOZA

大和座  
通信

## 日々新面目

## 其の十五

安東伸元

背筋を伸ばして顎を引き、首筋と肩の力を開放させて端座もしくは直立する。しかる後に、丹田に力を集める様に意識を集中させて声を発する。無理に構えることなく自然体でこの姿勢を我がものに出来れば、その人の声は明らかに聴衆の耳をとらえる主張を持つはずである。この説明に深い理解を示す学生がいない。また、彼らの肉体が根本的にそのような仕掛けを体現出来る構造になってはいないということが判る。そして、このようなたまたまいが格好良く美しいという認識は働いていないのだが、それならばその理論を我が身に即して体得しようという考えが生まれてくる様子もない。つまり、現実性のない絵空事のような理屈を一つ聞かされたに過ぎない様子を見てとれるのである。 古典伝統芸能に

携る人間が和装して端然と座す姿を映像や雑誌のグラビア写真で目にして、「さすがその筋の人たちは違うね」などと庶民が妙に感心する。正座する「辞儀をする」「襖を開閉するなどの立ち居振る舞いが、いかにもと思える切り口で格式を誇張して紹介される。来客を迎える、他家を訪問する、茶会を催す、仏事を営む等々に際して、そのような作法を教える家元という人物も紹介される。そして例えば、その先生が会席料理の食し方について、箸をつける順番や「迷い箸」「渡り箸」は禁物などと蘊蓄を傾けて教える。恥をかかぬ為という注釈を添えて時と場所に合わせた挨拶の文言までを教える。マナーの講習と称して慶弔の場に臨む時の服装や諸々の作法めいた事を教える教室や、相談室というラジオ・テレビ番組までが存在する。 気品があつて毅然とした風様を身につけるには、まずそのような習事作法の修得から始めるべきという社会通念が遍く巾をきかしていると思われるのである。 常日頃はいかにいぎたなく粗野な生活態度であつても、事改まらなくてはならぬ所で決まり事を守り、居ずまいを正しくさえしていれば恥をかくことはない。 そのための行儀作法を知識として備える事を常識と考え、それで一般的な身だしなみは充分という社会通念があるように思える。そこで大いに気になることは、日

常と非日常の間にある自我意識の使い分けです。万人に通用する好ましい品性というもの、日々の生活体験の中から身体に染み込んで醸成されるものが適正なはずである。 学生たちが容易に反応しない理由は、この図式に対する半ば本能的な拒否感によるものであると思われる。 日常生活の場において、凡そ礼儀作法をわきまえた様子を知らず、改まった時に見せつけられたり教えられたりする事柄が納得出来ず、面倒臭くも胡散臭くも見えるのは当たり前と思われる。つまり人間形成の基盤に骨肉化した人格や品性の存在が重要であると言う観念が芽生えていないのである。 親がその使い分けを良しとする常識内で生きている生活環境から品性豊かな子弟が育つはずはないわけである。 かつては、身のこなしや物言いなどに落ち着いた空気と品を感じさせる老人の姿を其処此処に見ることが出来たように思う。 自分が老いた時の姿とだぶらせてそのような老人たちを見ていた記憶がある。 何も特別な環境にお住まいの人ではなく、また選ばれた人でもなく、ごく当たり前に目立たない存在としてそのような老人の姿があつたように思う。 穏やかな会話、急須からお茶を淹れてさりげなく菓子をお勧め、決して貪らぬ飲食の様子、善悪をきつちり區別した物言い、付和雷同しない言動とい

うようなたたずまいが周囲の安息を誘った。近頃心して見回すと、自分の存在が後輩の子弟たちの眼にしっかりと映っていない事を思い知らされる故の苛立ちや失意が多く、老人の表情に読み取れる。そしてそれは、一様に頑な様子に見える。現今老人には、言わずもがなの事を言つて疎まれるか言うことを止めてしまふ結果の孤独な境地しかないようである。老齢年金を受給する身の私が何とも他人事のような物言いですが、ひたひたと押し寄せる老いに付き合つて近頃痛切にそう思います。走り書きの雑言多謝。「見せかけ」という言葉が、近年頭から離れないであります。如何にもそれらしくありながら真実ではないという「見せかけ」です。本物というものは、それなりの予備知識と意識の覚悟をもつてかからねば、その真価が手に入らぬ厄介さをもつた、重みと深さのあるものです。自我に目覚め精神の自立を願うならば是が非でもこの本物と格闘しなければならぬわけですが、この格闘の楽しさを知りもしなければ理解もせぬ大衆を巨大メディアが日々育成に努めています。本物の扱いはそれぞれの分野における専門学者にまかせて一応の体裁を整え、市井の庶民大衆へは手触り歯ごたえの柔らかな本物まがいを与える。そこで「見せかけのもの」が必要になるわけです。わが国の文化行政とアカデミズムはこのよう

な体制で君臨しています。そのアカデミーからは、まず噛み砕いた易しい導入からなると解説しますが、これは詭弁です。あなた達の文化意識はこの程度で充分なのでですよと説いて教え、これも見せかけに過ぎない納得を与えるためのキャッチ・コピーにほかなりません。そして詰まるところ、人間の心棒を揺り動かすような精神の変革が起こらず、わが国の民度が一向に上がらないというわけです。二十一世紀の現今でも、わが国の歴史的施政方針「大衆は依らしむべし、知らしむべからず」の大衆操作が見事に作動しているようです。時には大衆の中から、この不条理と欺瞞を告発する大義の士が生まれます。しかしこれらの人たちは、ことごとくアウトローの衣を着せられ、意を同じくする少数の人たちの神的存在であるに過ぎない例が嘗々と続いています。「見せかけ」万歳！を高唱しなければ生活が円滑に立ちゆかない経済の仕組みが、国民をがんじがらめに張り巡らされてしまっているのでしょうか。マスメディアは、実はそのものが見せかけに過ぎないものでありますから、本物と対峙して、見せかけでないものを見つけ出し報道する力などないものと判断して良いでしょう。得体の知れない閉塞感はこのような状況の中から漂いだしているのかもしれない。わが国では、この状況が何時の時代にあつても真

のアバンギャルド精神を圧殺して、見せかけの幸福と繁栄の虚像を補修し続けて今日に至っているのでしょうか。行政改革の是非を売り物にする現政府に、題目通り社会構造の根幹にメスを入れる改革精神があるとは思えません。従つてもう何を云う気も起こらないという空疎感が日増しに積もります。「見せかけ」であることを百も承知の上、仕方なくせつせと撰取し、国を愛する心を捨てず、なお勤勉であろうと努めるこの国の大衆は、私を含めて本当に健気です。

(六月二二日)



安東 伸元(あんどつ のぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

# 狂言を読む「磁石」

もろきゆう

スマトラ沖大地震の時、津波に家族をさらわれた子供たちが孤児となり、その後収容施設から大勢の子どもたちがいなくなつたという事件があつた。彼らは売られてしまつたのだらうという噂もあつたが、子供たちが一体どうなつてしまつたのか、追報道を見ていないので今もつて不明である。

ただ東南アジア諸国では子供を誘拐し、売り飛ばす組織が今も暗躍しているということはよく耳にする話だ。また二〇〇五年五月三〇日、朝日新聞の朝刊に次のような記事が載つていた。「アフリカウガンダ北部では毎日、農村の子供たちがいつせいに、夜を過ごすだけのために都会にやってくる。反政府勢力『神の抵抗軍（LRA）』の襲撃、誘拐を逃れるためだ。『忘れられた危機』とも呼ばれる内戦が始まつて十八年。ウガンダ政府とLRAの和平交渉は暗礁に乗り上げ、戦闘は今年に入つて激化した。人々は略奪と襲撃におびえながら、平和を待ち望んでいる。この十八年の間に子供達は二万人誘拐され、男の子は民兵に、女の子は食料の運搬役や司令官の妻にされている。だから農村部に住む子供たちは、NGOの箱船が開いている避難所に毎晩

やつてくるという記事だつた。前者は津波という災害に乗じて人身売買をなりわいとする組織が子どもたちを連れ去つたという話で、後者は戦乱に乗じて婦女子を誘拐していくという話だ。人権思想がこれだけ普及した現代社会においても、今も世界のどこかで子どもが誘拐され売られていくという、平和な日本社会ではあまり考えられないような出来事が起こっているのだ。もちろんこの平和な日本でも子供の誘拐や監禁事件は頻繁に起こっている。しかし、現在起こっている事件は社会的にその行為が是認されているものではない。だから犯罪として警察はやつきになつて犯人を捜しているのだ。それでは日本で人身売買や誘拐が公然と行われた時代があつたのだろうか。

藤木久志『雑兵たちの戦場』を読むと現在のウガンダのように戦乱に乗じて民衆を拉致するという「乱取り」が戦国時代に流行していたことがわかる。たとえば「武田軍が信州に攻め込んだとき、大門峠超えて敵地に入り、七日間の休暇が告げられると、陣中のかせ侍衆や下々の者どもは歓声をあげた。一帯の民家を襲つて小屋落としや乱取りを働いた。」という記録が『甲陽軍艦』にあるという。おそらく雑兵たちはご恩も奉公も武士道もなく、懸命に戦つても恩賞があるわけではない。そういう者たちを引き留めるためにも乱取りは暗黙のうちに許

されていたのであろう。こういう乱取りでさらわれた人々の中で親類のある者は、二貫から十貫文ほどの身代金で買い戻されていた。また永禄九年（一五六六）二月小田氏が上杉謙信に攻められて落城すると城下町はたちまち人の売り買いの市場となつた。そこでは二月から三月にかけて二十から三十文ほどの売値で人の売り買いが行われていたという。さらに、天正十五年（一五八七）四月、豊臣秀吉はイエズス会の宣教師コエリユに「ポルトガル人が多数の日本人を買い、これを奴隷として、その国に連れてゆくのはなぜか」と詰問している。コエリユはその事実を認めながらも、「ポルトガル人が日本人をかうのは、日本人が売るからだ。」と反論している。その直後、秀吉はバテレン追放令を出している。その中に「一、大唐・南蛮・高麗へ日本人を売り遣はし候事、曲事付、日本においては人の売り買ひ停止の事。」とあり、いかなる外国人へも日本人を売るのは違法であるとした。イエズス会も一五九六年以後しばしば奴隷貿易者の破門令を出し、ポルトガル人が日本の少年少女を買い取つて輸出する事を厳禁した。しかし秀吉自身、九州豊後国を平定するときはフロイスに「最悪の海賊・盗賊」と言わしめるほどの乱暴・狼藉・掠奪の数々を行っている。ある商人が豊後出身の十八歳の美しいキリシタン娘を二人買つ

だが、彼女たちは豊後大友氏滅亡の際に身売りされ、上方まで売り飛ばされてきたとイエズス会の記録にある。つまり、秀吉、家康が治安を回復し、政権を維持するために人身売買の禁止令を出すまでは、ある意味では公然と婦女子の誘拐や拉致が行われていたのである。また、五説経の一つ『山椒太夫』を読むと、人売りをなりわいとする集団による人身売買の様子が読み取れる。「陸奥の国、將軍岩城判官正氏は、讒訴により筑紫に流罪となる。御台所（みだいどころ）は厨子王丸（づしおつまる）、姉の安寿（あんじゆ）、乳母（めのと）を伴い四人で都に向かう。途中直江で宿を乞うが貸す者はなく、橋で一夜を過ごしていたところ、人買いの山岡太夫にだまされて売り飛ばされてしまった。乳母は海に身を投げ、御台は蝦夷が島に、安寿と厨子王丸は丹後の由良の湊の山椒太夫に売られる。その後安寿と厨子王丸は汐汲みと芝刈りの下働きに疲れ、脱走の計画を相談するが露頭し、拷問にあつて安寿は命を失い、厨子王丸は国分寺に逃れる。そこからさらに天王寺へ逃げ、天王寺の石の鳥居の奇瑞によつて腰が立つようになつた厨子王丸は梅津の院に見いだされ、本領を認められ、山椒太夫に復讐を遂げる。後、母を尋ね出し、父を迎え一族は奥州で栄えた。」という話だ。この時代は、人を商う者たちが跋扈していた

とみえる。御台たちが立ち寄つた直江は「越後の国直江の浦にこそ人売りがある、人かどはかしがあると。国々への風聞也。」とあつて、旅行者がよく誘拐される地域だといふのだ。そして御台一行は全員で五貫文で売られている。高貴な身分の者は高値だったにちがいない。同様の説経『をぐり』では伴侶を失つた照手姫がもつらが浦の商人に料足一貫文に売られている。ただし、照手姫は美しいので次々転売されて、万屋長者の元に来たときには十三貫文になつていた。いずれも人を商う者たちが、かどわかされた人を長者や庄屋に売りつけていたのである。

ところで、狂言「磁石」は上方を見物に来た遠江見附の宿の若者が、大津松本の宿で人売りにだまされて人買い宿に連れ込まれ、鳥目二百疋で売られてしまうという話だ。これは御台・安寿・厨子王・乳母の四名の旅人が売られるのとよく似たパターンである。安寿と厨子王は「姉が逃げよ、弟が逃げよ」と問答しているところを山椒太夫の息子三郎に聞きつけられて焼き金を当てられるという罰を受ける。この才能も知恵もない二人を助けるのが地藏菩薩である。地藏菩薩のおかげで頼に押された焼印が消え、厨子王丸は逃げる事ができる。他力本願の厨子王丸に対してこの狂言の若者は天才的な、あるいは詐欺師にも匹敵する知

恵がある。まんまと人売りになりすまして自分を売り飛ばした代金二百疋をせしめて逃げる。また追いかけてきた人売りにつきまわり、太刀を振り上げられたときには、「自分は磁石の妖怪だ、太刀を飲みたい」と偽つて人売りをだます。これは神や仏を頼りにする説経の主人公とは違う。自分の才覚と機知でもつて苦境を脱する抜け目のない町衆だ。観客も手を打つて喜んでない。この才能があれば武器がなくても我が身を守ることができないではないか。「日本も軍隊を持たずとも国を守れるのでは…」というのは飛躍だろうか。

注 説経本では山椒太夫はさんせう太夫・厨子王はづし王、と表記されているが便宜上漢字に直した。



山田 師久（やまだ もろひさ）

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例人輪讀会等の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

## お客様は相方です

〜イキが合う〜

森五六九(もりごろく)

ライブは常にお客さんと演者との関係だ。芸人は行く先々の水に合わねばならぬし、また迎合しすぎてもどんなん。会場の空気がピタリとひとつになるのはなかなかむつかしい。わざわざ私の拙い芸を観に会場まで足を運んで下さったお客さんがいい気分でお帰りになる。当たり前だがこれが大前提。「俺の芸が分からぬか」と豪語できるほど私は偉くない。でも迎合はしたくない。

もう何年も前になるが、どうしても見たかったが見逃してしまつた伝説の高座がある。その日はしばらくの舞台でなかなか見ることのなかつた可朝師が久しぶりに梅田花月に出演されるといので多くの芸人仲間後輩が舞台袖に集まつた。一体どんな咄をするのだろう。皆が固唾を飲んで見守る中、まず第一声が「いやあ、ホンマですな。いやホンマにホンマでっせ」かつて流行語にもなつた可朝師のこのフレーズに客席はドツと沸いた。当然そこからこのまま本題に入っていくのだからそこに居合わせた誰も思つていたはずだ。だがしかし、可朝師の「ホンマにホンマですわ」はその

後も続き、とうとう最後までそのフレーズを繰り返したという。「ホンマにホンマ」だけの二十分高座。袖へ消えて行く時さえ「ホンマにホンマ」と言い続けたらしい。その後ろ姿に観客からは万雷の拍手が送られた。これが伝説のあらましだ。まるで人を食つたような高座。この話を聞いた時、これぞ可朝師の真骨頂と思つた。こつという裏切りならぜひ出会つてみたい。さりながらお客さんもこの伝説を成立させた共犯者である。いや、ホンマにホンマ。

若井はやと師匠。「若井ぼんはやと」という名で一世を風靡した元漫才師である。コンビ解消後は漫談家として舞台に立たれている。十年以上前の話になるが、私はよく出番を御一緒にさせてもらった。御馳走にもなつた。当時ははやと師は自他共に認める道頓堀浪花座の星。どんなに重たい客席でも必ず起こして見せた。面白くもない芸が長々続き、客席はうんざりというより少し怒り気味。そんな時にこそはやと師匠の手腕が輝いた。うんざりさせた芸人の中に残念ながら私も入っている。・・・怒り気味のお客をなだめるように淡々と話に入っていく師匠。まるで催眠術が解けたように笑いこけるお客の姿に私はただ感心するばかりだった。はやと師の高座が終わると、師の弟子も含め数人でミナミの立ち呑みに直行といつのがいつもお決まりのコース。私

も御相伴組である。おかげで色んな話を伺うことができた。「あんな蝶六。一流と一流の違いに分かるか」相手に唾がかかるくらいグツと顔を近付けて喋るのがはやと師の癖。ただでさえ歯が突き出た師匠だからその迫力といつたらなかつた。そんな事はどうでもいいが。「二流の奴らはな、ネタの申し分ないが考えとれへんねん。誰が言つてもウケルんじや面白くないねん。わしの咄なんかそんな面白いこと言つてへんで」これにはずいぶん謙遜が入っているが、はやと師は「面白くもないことを面白く聞かせる引き込む」芸人を「一流」と称し、それを目指すとおっしゃつた。いやもう十分に一流に違いないのだが。確かに原稿用紙に起こしたら面白くも何ともない内容も多々あつた。それがはやと師匠の口を通すとたまたまなくおかしいのだ。私ははやと師匠の漫談を「イキ」と「間」の教科書だと思つている。まさに可朝師の伝説とツロクする話だ。御年配の方には徳川夢声先生がそれに当たる。

桂枝雀師匠が生前よくおっしゃつてましたのが「笑いは緊張の緩和である」という理論。はじめグツと息を詰めててパーツと吐き出す。グーツが「緊張」でパーツが「緩和」。大昔の人間がマンモスと戦つてそれを仕留める。戦つてる時は緊張なので息を詰めてる。けど、マンモスがドターッ

と倒れたら息をフーツと吐き出して、これが喜びの「笑い」であり、「笑いの元祖」なんだと、書物の中でも述べておられます。私の兄弟子の桂昇蝶は枝雀師匠のところ稽古をつけてもらっています。その昇蝶兄に私は稽古をつけて頂きました。「お客さんがお笑いになるのは『息を吐く』ということとやから、その前にまず息を吸うて頂かんならん。吸うてな吐かれへんねん。例えば喜六がここでアホなこと言つ。するとお客さんは『え？』という緊張を感じるわな。息詰めんねん。つまり吸うわけや。で、今度はこつちは吐きながら『ようそんなアホなこと』て言うわ。この緩和の言葉は吸うた息を吐きながら言つねん。吐く息に言葉をのせんねん。ほたらお客さんも『ホンマや』と吐きながら笑いはるわ。わしらが息吸うたらお客さんも吸う。わしらが吐いたらお客さんも吐く。それにわしらが吸わへんかったらお客さんも吸われへんやろ。つまり笑われへんちゆうこつちや。この呼吸と問、これが大事なんや。」

「イキが合う」という言葉はここから来たのでしよう。相手に息をつかせない（吸わせない）語りは聞いていて疲れる道理です。演者とお客の「息の吸う吐く」が合つてこそいい結果が得られるんだという「笑いの呼吸学」。狂言のお稽古も「謡」を基本に置きますが原理はおそらく同じことなんだと思います。昇蝶兄とお稽古はそこから男女間の色々にまで及びました。いやこれも同じ・・・と思います。・・・今日のお客さんとはイキを合わせられるだろうか」「お客さんは私のことを受け入れてくれるだろうか」「好きになってくれるだろうか」「お客様、貴方が好きです」「高座へ上がるということは愛の告白をしに行くような、お客様を口説きにかかっているようなものです。「芸人さんは歳より若く見える」ということをお客様からよく言われます。「なあ〜んも考えてませんアホですが、若く見えまんねやろ」と答えてますが、実はこの事に関係しているのかも知れませんが、ライブはお客さんと演者との関係の上になり立ちます。ほん二十分か三十分のお時間ですがおつき合い下さい。貴方こそ一緒にこの空間を作り上げていく相方なのです。いや、ホンマにホンマ・・・ホンマでんがな。

(了)



森五六九（もり ころく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECアカチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

## 「メソッド考 マルサリスの上達論」

井上放雲

ウィントン・マルサリスという、ジャズとクラシックの両分野で活躍する天才トランペット奏者がいる。もう随分前の事になるが、この人が司会進行・解説・実演を務めながら、子供達に音楽の基礎と楽しさを教える番組がアメリカで製作された。日本でも「マルサリス・オン・ミュージック」というタイトルで4回シリーズとしてNHKで放映されたので、ご記憶にある方もいらっしゃると思う。その中の第4回目のテーマは「一に練習、二に練習」と題され(原

題の直訳は「モンスターと戦う」)、マルサリス流の楽器上達法が展開されている。しかしそこで語られる内容は楽器の上達に限らず、スポーツや学問、さらには古典伝統芸能の修行にも当てはめて考えられる様な「心得集」或いは「メソッド」といった様相で大変興味深く、それを少々かいつまみながら紹介してみようと思う。

番組は、まずゲストのヨーヨー・マ(チェリスト)による、シヨスタコーヴィツチの『チェロ協奏曲』ソロ演奏から始まる。難しいパッセージをひとくさり熱っぽく演奏した所で、マルサリスが登場して前口上。曰く、楽器を上達しようと思ったら、練習

が大切だ。練習に練習を重ねないと一流にはなれない。しかし練習は難しくてつらい。練習を続けるには強い動機が必要だ。さぼつたら叱られる、位じゃ弱い。それは自分への挑戦であり、また新しい事を学ぶのは楽しい事だ。と述べ、自身が『ムード・イン・デイゴ』を演奏。演奏を終えた所で本題へ。曰く、練習はやり方を間違うとかえって害になる。そこで、彼の考える正しい練習方法の12箇条へと続く。

助言をしてもらおう。……指導者を探し、助言を求める。人間は自分では気付かない事が多い。

基本練習の予定表を作る。……何を練習するべきか、目に見える形にする。

目標を立てる……家造りに喩えるなら、土台に何日かけ、柱を何日で立て、壁をいつまでに仕上げるか、という様な目標を立てる。

気持ちを集中させる。……10分で出来る宿題を1時間かけていないか?自分を全つぎ込む。

ここで一旦マルサリスはヨーヨー・マに『ムード・イン・デイゴ』のレッスンを施す。ジャズのリズム感に戸惑うヨーヨー。続いて若手トランペッター、マーク・イノウエ君がフンメル『トランペット協奏曲』を披露。これも技術的に難易度の高い曲だ。

じつくり練習する。……焦らない事。慌

ては何も身に付かない。確実に吹ける様になってから次へ進めばいい。マーク君に先ほどの曲をゆっくりと演奏してもらおう。

苦手な部分は反復する。……苦手な部分は、つい避けてしまいがちだ。

全ての音を歌わせる。……曲の隅々にまで気持ちを込める。ささやかな部分にも興味を持って、何でもきちんとやる。自分らしさを大切にして全力で取り組む。しらくれた気持ちで取り組んじゃダメ!

失敗を気に病むな。……失敗から学べばいい。

ここでヨーヨー・マは、学生と共にチェロアンサンブルのリハーサルを行う。曲はバッハの『コラール』とプロコフィエフの『三つのオレンジの恋』より「行進曲」。

ヨーヨーから学生達へ、短い時間の内的確かつ示唆に富んだアドバイスが飛ぶ。

「休符の後の音は、パン!と平手打ちみたいな感じで!」「エネルギーを溜めてから、一気に爆発させるんだ!」「正確さより、表現に注意して!」等々。また、ヨーヨーは学生に尋ねる。「もし共演者の中に、ウマが合わなかったり意見が異なる人がいたらどうする?」「とにかく相手の意見を聞き、相手の事を理解しようと思います。」「と答える学生達。ヨーヨーの意見はこうだ。

「今自分たちは最高の演奏をするんだ、という様な、共通の目的を探るんだ。共通の

動機が全員を結ぶ。最初はバラバラだったアンサンブルが、次第に一丸となつていく様子が見て取れる。

続いてマルサリスによる公開レッスン。正しく音が出せる様になつたら次は個性が大切、と説き、14才の少年トランペッターによる『サム・マイナー・ブルース』が演奏される。マルサリスは少年に「力を抜けば音は伸びやかになる」とアドバイス。また人の演奏を聴いて真似をする練習方法を紹介する。マルサリスはヨーヨー・マに『ムード・インディゴ』の个性的なアドリブを、古典伝統芸能の口伝の様に反復させた。ここでマルサリスと彼のバンドによる『クール・ブルース』の演奏。再び子供達へのレクチャーに戻る。

技術をひけらかさない。……演奏出来る様になつたら、技術をひけらかす人がいるが、必ず嫌われる。受けねらいは底が浅い。技より音楽の中味が重要だ。

自分で工夫する。……一般的な練習が自分には合わない時もある。もっと良い方法はないか考えてみよう。

楽観的になる。……明るく考えれば楽しい。音楽は生活の塵を洗い流す。何事も前向きに考えるべきだ。

共通点に注目する。……異なる分野の事柄でも、共通点に着目すれば応用出来ることがたくさんある。大切なのは、目標・集

中・協力だ。

番組は最後に、マルサリスとヨーヨー・マによる『ムード・インディゴ』のコラボレーションで幕を閉じる。

以上、多少強引な意識も交えながら書き記してみた訳であるが、考えてみればこれと同じ様な、或いはこれ以上のメソッドを600年以上前にしたためていた先人が、我が国日本にいた。言わずもがな、能楽の祖・世阿弥である。

『風姿花伝』をはじめとして『至花道』『花鏡』など、能楽師の様々な心得から、もう少し具体的な技術論、さらには世界に通用する様な演劇論を展開している。世阿弥の言及していることについては、舞台人としての立場から、今後自分なりに少しずつ読み解いて行きたい。ともかくしばらくは「世阿弥」「メソッド」「エチュード」をキーワードとして、自らの技術的・芸術的・精神的な成長を期すべく、勉強と実践を積み重ねてゆこうと考えている。

(2005・6・14)



井上 放雲(いのうえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業、ポーツランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ『アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」』の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとっては最適の相談役。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏要員を勤める。

# 兆紀探求

小田兆紀

今回は装束の色についてです。ご存知の通り装束は単体としてみますと配色が派手です。しかし、様々組み合わせる事によつてそうではなくなりません。一度でも染めを

なさった事がある方でしたらご理解頂けると思います。思い通りの色に染める事は簡単ではありません。現在の化学染料を使用してもこうですから、当時の自然染料や外来素材を使用した染めはもつと大変だっただろうと思います。もちろん染めのパターンを確立するまでにたくさん失敗したとは思いますが、そうまでして染めなければならなかった理由に、一つには舞台衣装としての役割。観客の目を引く必要があったからという事と祝言性、もう一つはその全体の配色から登場人物の人となりを想像させる手助けを行う為でしょう。例えば安東先生と私が同じ役をやったとして、装束の組み合わせは同じになりません。それは単純に年齢差という理由だけではなくそれを演じる者と作品の登場人物に合った装束選びというのを言うからです。同世代の金久と比べてもそうです。決して同じにはならないのです。さて、今見てもおかしいどころか十分通用する装束の色ですが、正直私は

ここまで多種多様に染めを駆使した当時の人間の色彩センスに脱帽します。一口に「あか」と言っても朱や紅、茜、など様々あります。それらを染め比べそれぞれに適した色で作り上げる。そこで私は思います。当時の人間は色彩感覚に優れていたのではないかと。

前に一度試しに装束の配色を思い出しながら服選びをしてみました。シャツを衿の色に、上着を着付けにズボンを袴の色にそれぞれ置き換えて選んでみました。着てみても違和感の全く無いものにならざり今でも通用する事がわかったのです。これは極端な例でしたが、普段小名役などが着る「段」といわれる着付け。これは現在の模様と言いかえるとただの縞で、幅の大小こそあるものの街でよく見かける柄の一つです。装束と同じ柄というのはこれに限った事ではなくたくさんあります。格子柄や、少し強引ですがワンポイントという点でいえば縫箔の刺繍もそう言えるでしょう。現在それらをデザインした人が装束の事を知らずにそうしたとしても、何年前どころか何百年も前に既に存在していたというのは驚くべき事ではないでしょうか。同時にそれは中世室町時代の人間のセンスの良さを証明する事に繋がります。各方面に特化した人は結局中世や日本古来からあつたものに自然と帰ってしまうのではないかと、

それらは潜在的に私達の中にあり、訓練によつて呼び覚ます事が出来るのではないかと思うのです。

今に至つても通用するデザインと色、色褪せる事の無い装束の配色パターン。時代が下るにつれて様々取り入れて来たとは思いますが本筋は変化する事無く伝わっています。結局当時から考える事はあまり変わっていないという事。古典を知る事によつて、眠っている様々な感性が呼び覚まされてくるのではないのでしょうか。



小田兆紀(おだ ちよつき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

## 「呼吸」

金久蒼汲

美しい狂言台詞のために最も適した稽古方法は「謡」である。これまで大和座通信やA&Hホールでの演習で幾度か出てきた言葉なので、既にご存知の方もいらっしゃると思います。七五調で歌われる謡には拍や運び、強弱や緩急、抑揚や間など、日本語を表現する上での最も効果的な手法が盛り込まれています。「謡は語るように歌え、台詞は歌うように語れ」といわれるように、謡の技術や情感を習得した上で台詞を語る

ことができれば、心地好い台詞とともに、観客の想像の中に室町の情景が描き出されるであろうというわけです。ではその台詞や謡を表現する際に最も重要なものは何かそれは「呼吸」です。

成人男性の平均的な全肺気量は4900ml、一回の換気量は450ml、深呼吸は2000mlとされています。つまり私達は普段の呼吸では全肺気量の約10%、深呼吸でさえ約40%しか肺を使っていないこととなります。あくまで素人判断ですので間違っていたらお許し願いたいのですが、要は意識すればもつと無駄なく呼吸することができますのではないかと、言いたいです。そこで思い出されるのは、横隔膜を意識的に

下げ、肺への吸気量を意図的に増加させる「腹式呼吸」です。腹式呼吸は必ず「吐く」ことから始まります。肺の中の空気を腹筋と背筋を使って一旦全て吐き出すことで、改めて新鮮な空気をたくさん吸うことができるのです。この時気をつけたいのは、たくさん吸気しようとするあまり肩が上がりが、吸った気になってしまふこと。肩が上がっても肺の容量は変化せず、むしろ回りの筋肉が緊張し、吸気量は減ってしまいかねません。それに観客にとっては、いかにも

「今息を吸いました」というのが分かってしまい非常に興ざめです。いくら息が上がって苦しくなってきたとしても、しっかりと横隔膜を下げ、腹筋背筋で吸排気をコントロールすることが大切です。また「吸う」には最適なタイミングとスピードが必要になってきます。例えば狂言「酢薑」で演者二人が互いに素性を自慢し合う場面では、自信に溢れた口調で事の次第を間髪入れずに言い合います。その言葉の連続の中では、演者が苦しくなったところで悠長に息を吸う暇などありません。台詞のテンポを崩さないタイミングで、一瞬間で息を吸う技術が必要になってきます。また演技には意図的に息を吸うというものもあります。例えば場面が転換した時や感情が変化した時、前後の雰囲気や間を変えたい時などに有効です。私達はこれを「気を替える」と言っています。

す。改めて息を入れ替えることで、演者も観客も新たな気分で次へ移行できるというわけです。このように、普段何気なく行っている「呼吸」の中から「吸う」という行為ひとつをとってみても、演者にとっては的確な技術が必要とされます。まだまだ計り知れないこの「呼吸」というテーマは、次号以降も度々登場しそうです。

## 参考文献

「系統看護学講座 専門基礎1 人体の構造と機能1 解剖生理学」 医学書院



金久蒼汲（かねひさ そうきゅう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科学卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二〇〇三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二〇〇四年インドネシア公演旅行に参加。

# 大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

## 七月

二日【土】午後一時 大槻能楽堂

大槻同門会能

「高野物狂」「佛原」「盆山」「安達原」

一般券/三五〇〇円

「お問合わせ」

大槻能楽堂 〇六 六七六一 八〇五五

七日【木】午前十時 高槻ビッコ口保育園

狂言観賞会

「蟹山伏」ほか

(非公開)

十六日【土】午後一時 大槻能楽堂

上野松桐会定期能

「夕顔」「蚊相撲」「善知鳥」

一般券/四〇〇〇円

「お問合わせ」

朝陽会館 〇六 六三五一 〇二〇二

二十二日【土】午後六時三十分

富田中央公民館主催シリーズ公演の

「狂言鑑賞の夕べ」(要申込)

「口真似」「講話と演習」「神鳴」  
会場/重要文化財・旧杉山住宅  
「お問合わせ」

中央公民館 〇七二二 二四 三三三三  
教育委員会 〇七二二 二五 一〇〇〇

二十六日【火】午後六時 富松神社

富松新能

「太刀奪」「船弁慶」

## 八月

八日【月】午後二時

「古典芸能と出会うひととき」その三十六  
新シリーズ《日本語のちから》

「祈る日本語」

「舟船」「祢宜山伏」ほか

会場 千里中央「A&Hホール」

## 九月

六日【火】午後五時 姫路キャスパホール

(要申込)

「能・狂言さいしょの一步」その4

「お問合せ」

姫路キャスパホール 〇七九二 八二 五八〇六

二十八日【水】午前十一時 京都観世会館

浦田定期

「楊貴妃」「鳴子遣子」「殺生石」  
一般券/三五〇〇円  
「お問合わせ」

京都観世会館 〇七五 七七二 六一四〇五

## 出版のお知らせ

安東伸元・中野慎子著

## 『狂言画写の世界』

影印・作品解説・装束の着付・装束の構成

和泉書院出版

B5上製・全186項

定価5250円(税込)

本書は近世末期(天保十五年)の狂言舞台の  
写し絵を影印した書で、当時の演技、装束作  
り物を知る上で有用な資料となっております。  
書誌学の所産であると同時に、描かれた各曲  
の作品解説、現在舞台上で使われている狂言装  
束の被服学的考究(装束の構成)と着付けの技  
法を解説する連続分解写真資料(装束の着付)  
とを付録しているために、他に類を見ない出  
版物であると言えます。(七月初旬発売予定)

和泉書院 〇六 六七七一 一四六七

<http://www.izumi-pb.co.jp>

## 編集後記

だいぶ前になりますが、テレビで早期留学を題材にした番組を見ました。『子どもの将来のため』ということと早期留学を決意したご家族のお話でした。外国語を身につけるには、少しでも早く留学した方がいいというのが通説です。この番組に出演されていたご家族もこの通説に従い、確か小学校低学年であるお子さん二人を連れて留学をされていました。私はこの番組を見て、これが本当に子どものためになるのだろうか、大いに疑問を抱きました。といいますのは、言葉はその国の文化や習慣と切り離して考える事ができないものだからです。その子ども達が流暢に外国語を話せるようになる頃には、身に付いた習慣も外国のものになってしまふのです。自己のアイデンティティーの確立していない子どもが外国で暮らし、その国の言葉を操り、その国に適応していくという事は、言葉を道具として身につけるといえるのではなく、自身自身が外国人化する事を意味します。いずれは日本に帰国をするその子達は、自分の国である日本に戻って、自国の文化と自分が身につけている文化との間で悩まなければならぬ現実と直面するのです。高校を卒業して留学をし、6年間の留学生生活を終え帰国してきた友人がいます。留学先

で見事に大学まで卒業して帰国したその友人は、留学先の国の言葉をネイティブ並に操る事ができます。外国語を身につけたいという目的は見事に果たされました。先日の友人と再会をし、いろんな話を交わしたのですが、人が羨む完璧なバイリンガルとなったこの友人もやはり悩みを抱えていました。高校からの6年間というのは子供から大人へと変わっていく大事な時期でもあります。人とのつきあい方にしても、高校までのとは異なってきました。社会構成員の卵としてその社会について学ぶそんな大事な時期をこの友人は海外で過ごし、外国の文化を身につけてしまつたのです。彼女がそのままその国に定着し、就職をしたのなら何の問題もなかったかも知れませんが、やはり留学は留学です。彼女は帰国を希望しました。完璧なバイリンガルである彼女はその言語能力を活かし、就職活動を試みるのですが、ここで壁にぶつかったのです。まず、就職活動をしている同期が日本に一人もいません。就職の情報交換もできません。友人への相談もなかなか出来ません。大人として相談ができる友人や先生方は皆日本にいないのです。また、周りの人との付き合い方がいつの間にか外国人化している友人は、人付き合いにおいても違和感を感じなければならず、社会の輪の中で非常に浮いた存在になつてしまつ

たのです。言葉と文化を完璧に修得した留学は成功したといえるかも知れませんが、自分の国であるにも関わらず、習慣の違いで苦しまなければならぬ彼女をみますと気の毒でなりません。早期に留学するというのは、成人してから留学するより外国の言語や文化を修得するスピードや完成度は高いかも知れませんが、しかし、私の友人のような悩みを強いられる事があるという事を忘れてはならないと思います。

秀

発行日 二〇〇五年六月二十八日  
発行責任者 許 秀美

## 大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp



